

A Study of the Gaelic Football Class into Physical Education in University

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Okubo, Hideaki, Enomoto, Masayuki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/19740

大学体育(共通教育)におけるゲーリックフットボール授業の実践研究

A Study of the Gaelic Football Class into Physical Education in University

大久保英哲 榎本 雅之*

Hideaki OKUBO and Masayuki ENOMOTO*

○はじめに

本研究は平成 20 年度前期金沢大学共通教育科目の身体・スポーツグループの科目である「リフレッシュスポーツ」で行った。「リフレッシュ」は、気分をさわやかに一新すること。生気を与え、元気づけること(新村出編、広辞苑第四版、1991)という意味がある。このことから、リフレッシュスポーツは、運動による刺激によって、気分を一新させる、生気を与え元気づけることと考えられよう。そのため、リフレッシュスポーツとして、技術や体力面で運動者に強い負担をかけない運動が行われることが多い。しかし、本授業では、リフレッシュの意味を広義にとらえ、心身を一新することに加え、学生達のスポーツに対する考えをリフレッシュしたいと考えた。そのために、日本ではほとんど見ることやその存在すら知ることのできない競技スポーツ、ゲーリックフットボールを教材として取り入れた。ゲーリックフットボールを教材として用いることは、筆者がアイルランドでその競技を観戦したことがきっかけである。ゲーリックフットボールは、足のみを使うサッカーとフィジカルコンタクトが非常に多いラグビーが混ざり合ったようなスポーツである。サッカーやラグビーと異なるフットボールを学生たちが体験することにより、近代スポーツについて再考する教材として価値が高いと考えられよう。

以上のことから、本研究では、ゲーリックフットボールの授業について報告することを第一の目的とする。次に、本授業により、学生達のスポーツに対する考えにどういった変化をもたら

したのかを明らかにすることを第二の目的とする。また、サッカーとラグビーのルールが混ざった様なスポーツであるゲーリックフットボールを大学体育の教材として利用できる可能性を検討することを第三の目的とする。

本報告では、まずゲーリックフットボールの概要を述べる。次に授業の内容と学生の最終レポートによる評価について整理する。そして、本実践について考察を加え、ゲーリックフットボールを大学体育の教材として利用することについて検討を行う。

○ゲーリックフットボールの概要

ゲーリックフットボールはアイルランドを中心に行われているスポーツであり、カウンティ(日本の県に該当する)の選抜選手によって構成されたチームによって争われるオール・アイルランド・チャンピオンシップスの決勝には 8 万人もの観衆をスタジアムに集める。1884 年に設立されたゲーリックアスレティックアソシエーション(Gaelic Athletic Association; 以下、GAA)によって運営され、プレイヤーは全てアマチュアの選手である。また、クラブはカソリックの教区を基本にアイルランドの至るところで組織されている。こういったクラブや GAA の活動の多くはボランティアでなされている。さらに、英国との対立の歴史関係から、ゲーリックフットボールは対英国のシンボルの一つとなり、プレーする人々はゲーリックフットボールの男らしさや勇猛さといった精神性を重視している。

ゲーリックフットボールの主要なルール

ゲーリックフットボールのルールについて、2008 年 GAA 発行のルールブックから概要を述べる。

テクニカルファール

- ・ プレイヤーは直接ボールを地面から拾い上げてはいけない。つま先を使って地面から拾い上げ手に持つ行為は認められる。
- ・ プレイヤーがボールをつかんだまま 4 歩以上のステップをとることはできない。プレイヤーが、ボールを手から足に落とし、また手に戻すトゥ・タップによるソロ・ラン (solo-run) ができる。
- ・ プレイヤーは手 (こぶしや手のひら) を使ってボールをパスしたり (ハンドパス)、キックを使ってボールをパスしたり (フットパス) できる。

相手選手に対する反則

- ・ タックリング (Tackling)
- ・ 引っ張る (Pulling)
- ・ プッシング (Pushing)
- ・ 殴る (Striking)
- ・ 危険行為 (Dangerous Play) : レフリーがその選手のプレーが危険だと判断したなら、レフリーはすぐにその行為を行った選手に対して注意を行う。もしそれで変わらない場合があるなら、警告 (イエローカード) を与え、なお繰り返すようであれば退場を命じる。

違反後の再開方法

- ・ 違反のあった地点からフリー (サッカーのフリーキックと類似したもの) によって再開する。

競技場

- ・ ピッチ : 縦 137 (130~145)m、横 82 (80~90)m。
- ・ ゴールラインから 13m (ペナルティーライン)、20m、45m (フォーティファイブ)、65m (シックスティファイブ) のところにゴールラインと平行にそれぞれラインを引く (図 1 参照)。
- ・ ゴールの形 : ラグビーと同様の H 字型。2 本の直立したゴールポストが 14 ヤード離れて立っており、クロスバーが地面から 8 ヤード離

れてゴールポストの間に、地面と水平にかかっている (写真 1 参照)。

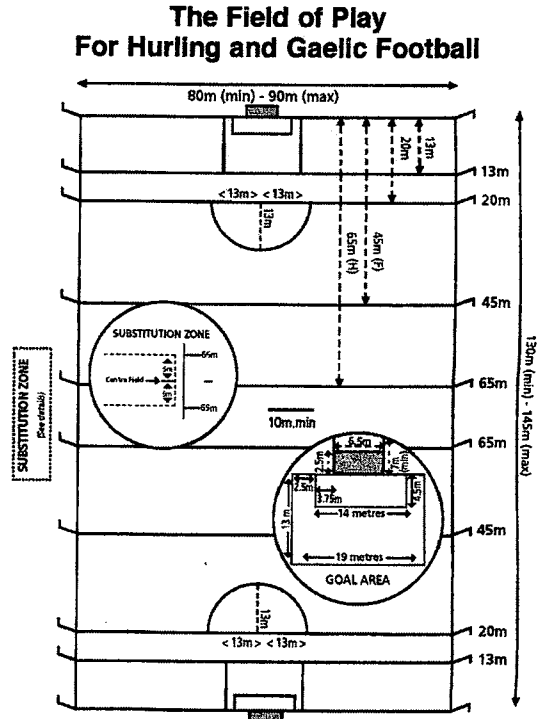


図 1 競技場 (GAA OFFICIAL GUIDE - PART 2, Central Council of the Association, 2008, p.4)



写真 1 ゲーリックフットボールのゴール (2007 年筆者撮影、Dublin City University 隣、Albert College Park に設置されていた。アイルランドでは、所々にこういったゴールが見られる)

ボールサイズ

・ボールは球状で重さが 370~425g、外周が 69~74cm。ほぼサッカーボール(重さ 410~450g、外周 68~70cm)と同様。

試合時間

・原則 60 分(前半 30 分、後半 30 分)、ただし大会によっては 70 分(35 分ハーフ)

プレイヤー数

・1 チーム 15 名(うちゴールキーパー1名) 選手の配置は図 2 を参照。

ゲームの開始

・グラウンドの中央で、両チームの選手の間にはレフリーがボールを投げ上げ試合を開始する。

ゴール方法

- ・ポイント(Point)は相手側のゴールポストにはさまれたクロスバーの上をボールが超えた時に加えられる。
- ・ゴール(Goal)は相手側のゴールポストにはさまれたクロスバーの下をボールが超えた時に加えられる。1 ゴールは 3 ポイントの価値がある。

○ゲーリックフットボールの教材としての価値について

本研究では、ゲーリックフットボールを大学体育の教材として導入することの価値について、次の特性に着目して行った。

- ①サッカーやラグビーと同等の運動量が確保できる。
- ②技能的にサッカーやラグビーよりも容易にプレーできる。ただし、ルール理解や技術の種類を知るための時間をとる必要がある。
- ③ゲーリックフットボールで利用する技術は多岐にわたる。したがって、その技術を抽出し、ボールが浮いていれば一度キャッチしてプレーしてもいいサッカーというように、本来のゲームとは異なった動機付けによるサッカーやドッチボールなどのゲームを授業内で行うことができる。
- ④新たなスポーツを行うことにより、チャレン

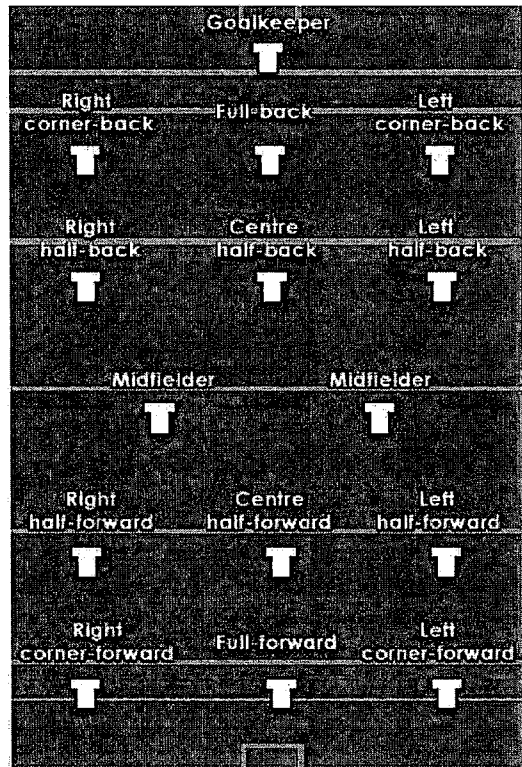


図 2 選手の配置(GAA 公式ホームページ;
http://www.gaa.ie/page/all_about_football.html)

ジ精神を養い、未知のスポーツであることから、新たな技術、ルールを獲得するために積極的な仲間との関わりが期待できる。また、全くゲーリックフットボールの情報がないことから、自分で新たな個人戦術を開発したり、仲間同士で集団戦術を作り上げることができる。

⑤ゲーリックフットボールで用いる技術のほとんどは、これまでの学校体育で経験している。これらの技術を複合して利用するゲーリックフットボールは、ゲームの中で自分のこれまでに獲得した技術を発揮することができ、技術を組み合わせる楽しさもある。また、サッカーやラグビー、バスケットボールに比べるとルールの制限が甘く、受講者はゲームを容易に楽しむことが期待できる。

⑥ゲーリックフットボールは激しいボディコン

タクトのあるスポーツなので、競技中の安全性を高めるための話し合いにより、スポーツを行う際の安全に対する意識を高めることができる。

本論では考えうるこれらの価値について、受講者の姿及び感想から整理していく。

○ゲーリックフットボールの授業

授業の主題

アイルランドの国民スポーツであるゲーリックフットボールに挑戦し、ゲームのルールや特性を理解すること。

授業の目標

ゲーリックフットボールのルールや特性を理解すること。ゲームに必要なスキルを身につけ、ゲームを楽しむこと。

学生の学習目標

仲間と教え合い協力することを通じて、ゲーリックフットボールのルールや特性を理解すること。

授業の概要

本授業では、男女の制限なく最大 40 名の学生履修者を基に、授業計画を作成したが、最終的な履修者は男子のみ 13 名だった。そのため、次のように授業計画を修正し、実施した。また、雨天時は体育館でフットサルをおこなったため、ゲーリックフットボールに関する総学習回数は 12 回だった。

本授業内で行ったサッカーは、特別の記述がない限り、実際のサッカーの半分のコートで行った。サッカー場で授業を行う際、H 字型のゴールではないので、両ゴールポストを上に延長し、ゴールバーを越えた時、ポイントと認定した。

・第一回 (体育館)

ガイダンス、ゲーリックフットボールの大まかな説明。ルールブックの配布。

・第二回 (サッカー場)

技術練習：キャッチ、キック

ゲーム：ドッチボール (ただし、ボールを投げる代わりにキックを使う)

・第三回 (サッカー場)

技術練習：キャッチ、キック

ゲーム：サッカー (通常ルールのミニゲーム)

・第四回 (講義室)

ビデオ学習。ゲーリックフットボールの試合のビデオを見てルール、技術の確認。

・第五回 (サッカー場)

技術練習：ソロラン、ハンドパス

ゲーム：空中のボールはキャッチをしても良いサッカー。

・第六回 (サッカー場)

技術練習：ソロラン、ハンドパス、シュート (ゴール)

ゲーム：サッカーコートでのゲーリックフットボール。ポイントはなし。

・第七回 (ラグビー場)

技術練習：シュート (ポイント)

・第八回 (講義室)

ビデオ学習。ゲーリックフットボールの個人戦術、集団戦術の確認。

・第九回 (サッカー場)

技術練習：シュート (ゴール・ポイント)

ゲーム：3 分の 2 のサッカーコートを用いてのゲーリックフットボール (パスはハンドパスのみ)

・第十回 (サッカー場)

技術練習：集団戦術の練習

ゲーム：3 分の 2 のサッカーコートを用いてのゲーリックフットボール

・第十一回 (サッカー場)

技術練習：集団戦術の練習

ゲーム：3 分の 2 のサッカーコートを用いてのゲーリックフットボール

・第十二回 (講義室)

まとめ

自分たちの試合のビデオ鑑賞。ゲーリックフットボールの授業のレポート作成。

指導の実際

ゲーリックフットボールの授業は教員にとっても学生にとっても初めての経験であった。そ

のため、基本的にサッカーの指導から発展させる形で授業展開を行った。本実践では、ゲーリックフットボールの正規のグラウンドが確保できず、サッカー場とラグビー場を使用することで代替措置をとったこと、また、正規のゴールがないため、サッカーとラグビーのゴールで代用した。ボールは正規品が1個であったので、練習などではサッカーボールを使用した。本実践では、授業中の学生の意見などを取り入れながら、突き指を防ぐためにボールの空気圧を下げることや、運動量を適切にするため競技場の広さや試合時間などを調整した。授業時間(90分)を三分割し、基本的に、最初に、ファンダメンタルスキルを向上するトレーニングを導入し、次に、学習したファンダメンタルスキルを利用したゲーム、最後に、まとめのゲームを行った。履修者が少なかったため、チームに分けた戦術トレーニングは行えなかったが、サッカーの集団戦術を応用したグループトレーニングを、シュートの練習を取り入れた第六回以降に組み込んだ。

第四回、八回、十二回のビデオ学習では、指導が技術やルールのみになるのではなく、サッカーやラグビーのカウンターカルチャーとしてのゲーリックフットボールの歴史的背景や、アイルランドでのGAAのクラブ組織についてなどを講義した。

受講者

1年生11名、2年生2名

受講者の運動経験は3名が大学硬式野球部所属、2名が高校までサッカー部所属、1名が高校時代水球部所属、2名が中学または高校時代にバスケットボール部所属、1名が高校時代ハンドボール部所属でそれぞれボールをキャッチする、ボールをキックするといったゲーリックフットボールの技術と関連のある運動部活動に所属した経験があった。

○学生の評価

最後の授業で提出したレポートから、学生13

名をA~Mとし、ゲーリックフットボールの授業に対して次のような記述が見られた。

A.

- ・トラベリングの規則があいまい。
- ・キャッチングがゲームにとって重要である。
- ・こんなスポーツがあると知れて良かった。

B.

- ・サッカーやラグビーに比べて競技スポーツとして未完成だと感じた。ヴァイオレーションとファールの区別がつきにくく、個人技は多いがチームプレーがあまり見られない。
- ・曖昧さがゲーリックフットボールのおもしろい点である。
- ・ロングシュートは面白みを減らす。

C.

- ・男のスポーツの印象。激しく体がぶつかり、力強さがある。
- ・伝統スポーツ独特の誇りを感じる。

D.

- ・大学では今までにないことを学びたいと思っていたので、ゲーリックフットボールができて良かった。
- ・サッカーの中で手を使う不思議な感じだった。
- ・授業を通じて本格的なゲーリックフットボールのようになってきて良かった。

E.

- ・激しいスポーツだと感じた。

F.

- ・ゴールする技術が難しい。
- ・H字の上へのゴールはないほうが良いと思う。
- ・これからの人生においてゲーリックフットボールをする機会はない気がする。

G.

- ・サッカーのようであるが、手を使えるという非常識さがおもしろかった。
- ・珍しいスポーツであるゲーリックフットボールと一緒にプレーしたメンバーに感謝したい。

H.

- ・体のぶつかりあいがおもしろい。

- ・レフリーのジャッジが一定でないのがおもしろい。

- ・恐れずにプレーすることに男らしさを感じる。

I.

- ・激しいスポーツだと思った。

- ・サッカーとよく似ているが、手を使ってよいという点でサッカーとは違った楽しみがあると思う。

J.

- ・ルールがいい加減だと思ったが、このいい加減さが試合を激しくさせているのではないか。

- ・危険なスポーツである。

- ・サッカーに比べ自由な分、その為に生じる難しさも多くあった。

K.

- ・バスケットボールとサッカーを足したような競技だった。

- ・ゲーリックフットボールは、この授業に出るまで存在そのものを知らなかったが、実際やってみると奥が深かった。

- ・サッカーはあまり得意でなかったので少し心配だったが、足以外にも手や頭で色々なパターンのプレーが楽しめた。

- ・このような競技ができるのも大学ならではだと思うので、とても貴重な経験になって良かった。

L.

- ・サッカーとラグビーを足したようなスポーツだった。

- ・選手同士がぶつかりあうとても白熱するスポーツだった。

- ・とてもとまどったが、試合のビデオを見て、自分でやっていくうちにこのスポーツがとても好きになった。

- ・初めはボールを足ですくいあげることや、手で持ってうまくコントロールして味方にパスするのが難しかったけど、慣れてきてシュートが決まったりするととてもおもしろかった。

M.

- ・ゲーリックフットボールはとても激しかった。

- ・フィジカル第一のスポーツな気がする。

- ・パスを通すのが難しく、遠くからシュートを打ったほうが効率的だと思った。

- ・接触によるファールが少ないため、サッカーやバスケットなどのスポーツに比べて、より原始的でボールを奪いにいくということが楽しく感じた。

○まとめ

本研究の目的の一つであったゲーリックフットボールを教材として利用することにより、学生たちのスポーツに対する考えをリフレッシュすることについて、達成できたと考える。それは、学生の評価にあるように、ゲーリックフットボールを未完成なスポーツととらえ、これまで経験したスポーツで形成されたイメージとの違いを楽しみ、また、このスポーツを楽しむための改善方法が提案されていることからわかる。元来、様々なスポーツは、プレイヤーが楽しむために、自分たちでルールや技術を工夫し、作り上げてきた。本実践では、当初、ゲーリックフットボールを「サッカーとラグビーが合わさったようなスポーツ」と紹介したことにより、受講者がそれらのスポーツと比較し、ゲーリックフットボールのおもしろさをサッカーやラグビーのそれに近づけようと考えた可能性もある。しかし、学習が進むうちに、ゲーリックフットボールが一つの完成されたスポーツであることに気付き、その独特の技術を習得することや、それを「原始的」と考えながらもゲームを楽しむ始めた。以上のことより、ゲーリックフットボールを学習することを通じて、受講者に異なる近代スポーツの存在を提示し、これまでのスポーツの概念をリフレッシュすることができたと考える。

次に、ゲーリックフットボールが大学体育の教材として利用できるか、という点について検討する。本実践では、前述したゲーリックフ

トボールの教材としての価値①～⑥を意識して伝えたこともあってか、受講姿勢、受講者の評価からほぼ達成できたと考える。しかし、大学体育の教材として利用する際、以下の問題点が明らかになった。

・怪我の危険

これまで経験したことのないスポーツでかつフィジカルコンタクトが多いことから、受講者がプレー中に危険を予測できず、怪我をしてしまう可能性がある。本実践では、受講者が突き指をしたことと、ボールをブロックに行った学生が顔や腹にボールを当てた。本格的な試合では通常起ることではあるが、受講者はこれまでのスポーツ経験からか、それらのプレーを危険と考えていた。

・ルールを理解することの難しさ

受講者にとって、全く新たなスポーツであることから、ルールを理解させることは難しく、本実践では、ソロランなどの特殊な技術を取り上げ、その技術に特化したミニゲームや技術練習を段階的に行うことにより受講者に伝えた。本実践では受講者が13名ということもあり、ルール理解にかかる時間は多人数で行うよりも容易であったが、サッカーやラグビーに似ている分、受講者がその違いを理解するのに時間を要した。

・用具の不足

ボールはサッカーボールの空気圧を下げることで代用可能であろう。ゴールに関しては、当初、最終的にラグビーゴールで行う予定であったが、ラグビーのH字型の下の部分がサッカーのゴールに比べて大きいことや、ラグビーのゴールが埋め込み式で移動できないことから、サッカーゴールを利用して行った。しかし、サッカーゴールの形状だと、ゲーリックフットボールの特徴であるポイントの得点方法への動機付けが難しくなり、実際のゲームでも、受講者がポイントよりも積極的にゴールを狙いに行く姿勢が見られた。

○おわりに

本実践では、受講者が積極的な姿勢でゲーリックフットボールに取り組んだことにより、前述した授業の主題、授業の目標、学生の学習目標はいずれも充足できたと考える。実際の授業として行っていくには、怪我の危険性や、ルールを理解することの難しさ、用具の不足などの問題がある。しかしながら、これらの課題を解決するために、受講者はミニゲームのルールの修正を求めるなど、受講者が積極的に関わり、指導者から新たな知識や技術を伝える一方向的でない発展的な授業を行うことができた。

20歳前後の学生が多数を占める大学体育において、誰もが手軽にできる軽スポーツではなく、その若いエネルギーを発散できる新たな競技スポーツを提案することは、学生たちの好奇心に応えることのできる教材だと考える。さらに、ゲーリックフットボールは前述した教材としての価値を持っている。全く未知のスポーツであるにも関わらず、その個々の技術はこれまで学校体育で行った教材を通してほぼ学習しており、「全く知らないのにある程度できる」こともゲーリックフットボールの学習を進めるにあたってプラスに作用したと考える。以上のことから、取り組むべき重要な課題はあるものの、ゲーリックフットボールは大学体育で扱う一教材として利用する価値があると考えられる。

附記

本研究は榎本雅之が2008年度金沢大学共通教育の非常勤講師として担当したゲーリックフットボール授業の実践記録である。サッカーのように近代化されず、それ故に洗煉されない粗野なプレーも容認される未知の激しいスポーツであり、やや危険も伴う。はたして学生達に受け入れられるかどうか、不安な思いもあったが、終わってみれば学生達の評価は高かった。残念ながら榎本雅之の非常勤講師は諸般の事情から単年度で終了せざるを得なかった。それだけに貴重な実践記録になりうると判断し、本紀要に収録した次第である。文責については

指導教員である大久保が責を負うが、その功績は榎本雅之に帰することを明記しておきたい
(大久保英哲)

参考文献一覧

Gavin Mortimer, *The Ultimate Guide to Gaelic Football*, Gill & Macmillan, 2008

GAA 公式サイト(<http://www.gaa.ie>)

ルールブック:

(http://www.gaa.ie/page/official_guides.html)